『古代アメリカ』20, 2017, pp.57-78

＜論文　特集＞

アンデス的特徴に関する考察

渡部森哉
（南山大学）

【要旨】

本論文は先スペイン期の諸社会の実体をより整合的に記述し、総体として捉えてまとめ上げるための概念としてのアンデスを検討することを目的とする。文化領域の 1 つであるアンデスの特徴、アンデス性を示すのに、「ロ・アンディーノ」というスペイン語が用いられる。しかし、何をもってアンデス的と言えるのかについての研究は不十分である。本論文では先スペイン期最後に台頭したインカ帝国の特徴を基準とし、その特徴が先インカ期に認められるかを検討する。特に、アンデスの物質文化を考える際のポイントとして、1. 垂直性と自給自足、2. 富・土地・労働力、3. ワカと儀礼、4. 作られた仕事と時間、5. 宮殿と神殿、6. 都市と専業化、7. 墓とミイラ、8. アンデスの図像表現、9. 新世界の双子、の 9 つの項目について論じる。インカ帝国は多様な自然環境を内包するアンデスを政治的に統一し、文化的共通性が達成された。そのためアンデスの特徴するためには、北部と南部、山地と海岸、という区分を超えた全体的な理解をする必要がある。

【キーワード】

ロ・アンディーノ、垂直性、ワカ、儀礼、物質文化

【目次】

1. はじめに
2. アンデスという枠組み
3. インカ帝国とアンデス
4. アンデス的特徴
5. 北と南、山地と海岸
6. おわりに

１．はじめに

人類は地球上の大部分に拡散し、それぞれの土地で文化を創り上げた。人類には共通の特徴もあるし、相違点もある。相違点に着目することで文化の分類が行われ、それぞれに名称が付される。アメリカ大陸の先スペイン期の諸文化を扱う際には、「文化領域（culture area）」と呼ばれる分類概念が用いられることが一般的である［*cf.* Willey 1971］。ヨーロッパ人が 15 世紀末からアメリカ大陸に到着し、旧世界の文化と新世界の文化の混淆が始まるが、その時点を基準として先住民文化を共時的に分類する枠組みが文化領域である。ある時点での分類であるから、通時的な視点はあまり重視されておらず、歴史を重視するヨーロッパと対置されたアメリカ大陸先住民文化が、どのように位置づけられたかを示している。一方、ヨーロッパでは、ドイツ、オーストリアの民族学で使われはじめた「文化圏（Kulturkreis）」という概念が用いられるが、それはある程度の時間幅を内包している。

15 世紀末から 16 世紀はじめという特定の時点で分類されたアメリカ大陸の様々な文化領域の 1 つが「中央アンデス」である。本稿の目的はこの文化領域の特徴について考察することにある。

２．アンデスという枠組み

アメリカ大陸における文化領域の 1 つである「メソアメリカ」の特徴に関しては、パウル・キルヒホフによるまとめがしばしば引用されている［Kirchhoff 1943］。しかしアンデスにおいて同様の頻度で引用される論文や著書は存在しない。アンデスと大まかに設定されている対象があり、その地域の諸文化の共通点を列挙したものがアンデス的特徴とされてきたが、それを体系立てて説明することは実は難しい。むしろアンデスという言葉、イメージが先行して語られてきたと言える。アンデス的特徴、アンデス性は、スペイン語で「ロ・アンディーノ（*lo andino*）」と呼ばれる。アンデス的特徴が強調されるのは、主に 2 つの方向性があり、互いに表と裏の関係にあるように思われる。

1 つは相違点に着目したアンデスである。例えば、植民地時代以降、ヨーロッパの文化と対峙されたアンデス、あるいは他の古代文明とが比較対照されるアンデス文明などである。オリン・スターン［Starn1991: 66］は、現代まで続くアンデス的伝統を想定する立場を、アンディアニズム（Andeanism）という言葉で説明する。それはオリエンタリズムと同様に他者表象としてのアンデス的特徴であり、相違点に注目したアンデスである。他の古代文明との比較においても、当然ながら相違点がアンデス的として記述される。

もう 1 つは同一地域内での文化的連続性に着目して語られるアンデス的特徴である。先これは最大公約数としてのアンデスと言え、古代アンデス文明という枠組みと大まかに対応する。先スペイン期アンデスの最後に登場したインカ帝国がアンデス文化の基準点として設定され、それをモデルとして先インカ期の諸文化が解釈される場合がしばしば見られる。そのため旧世界の諸文化とは異なり、アンデス考古学の概説書は、古い時代から説き起こすスタンダードなタイプのもののほかに、最初にインカ帝国について記述しそれをモデルとして先スペイン期を記述するものがある［*cf.* Moseley 1992］。

アンデスというイメージがどのように形成されたか、どのような変遷を経たのかは興味深いテーマであるが、それは本稿の目的ではない。本論文の目的は、あくまで先スペイン期の諸社会の実体をより整合的に記述し、総体として捉えてまとめ上げるための概念としてのアンデスを検討することにある。

1948 年にウェンデル・ベネットが発表した「ペルー共通伝統」という論文がある。「共通伝統（co-tradition）」

は、静態的ではなくある程度の時間幅を考慮していることから、文化圏と類似した概念である。ベネットがペルー共通伝統の要素として列挙したのは、生業、栽培作物と家畜、農業技術、衣服、工芸品、図像、建築、セトルメントパターン、社会組織、労働、埋葬、宗教、といった項目についてである［Bennett 1948: 2-3］。そしてアンデスの否定的要素として、甕棺埋葬の欠如、弓矢の欠如、水上運搬の未発達を挙げている。

ベネットも言及しているように、アンデス的として強調される特徴に、ある文化要素の欠如がある。つまり、他の文化領域の特徴が比較対象として前提とされ、それらとの関係で語られる。例えば、文字、弓矢、轆轤、鞴、窯、釉薬、製鉄技術、大型家畜、動物の乳利用、車輪、市場、貨幣、などの欠如である。一方で、存在する特徴については他の諸文化と共通する特徴が多いため、それらを単独で取り上げ、アンデス的と言うことは難しい。そして旧世界やメソアメリカなど他の古代文明に認められるいくつかの文化要素が欠如しているけれども、文明社会が出現したという組み合わせが、アンデス的特徴として説明される。そのため、何か特定の文化要素をもってアンデスであるかどうかを判定するのではなく、文化要素の組み合わせに注目する必要がある。

３．インカ帝国とアンデス

先スペイン期のアンデス的特徴を議論する際に、しばしば基準となるのはインカ帝国である。また植民地時代や現代のアンデスを研究する際にも、しばしばインカ帝国まで遡り、議論がなされる。インカはアンデス文化研究の１つの基準となっている。

アンデス的特徴は、インカ帝国という中央集権的社会に組み込まれたという社会的要因によって規定され、そうした政治的動きによって組み込まれた人々の間で、共通性が生まれた(註1)。このように、徐々に広まった文化的特徴の共通性ではなく、比較的短期間の特定の時代の共通性を考古学的に説明するのに有効な概念として「ホライズン」がある［Willey 1948］。ホライズン概念は同時代性を想定する概念であり、その認定のために土器や図像などの文化要素が指標とされる。文化的共通性は必要条件であるが十分条件ではない。つまり同じ文化要素であっても違う時代に属すればホライズンとは捉えられない。また広範囲に広まらず、特定の地域に限定される場合はホライズンではない。アメリカ合衆国では、ジョン・ロウが提唱した、３つのホライズンを設定し、その間を中間期と呼ぶ時期区分が用いられることが一般的である［Rowe & Menzel, eds. 1967］。問題は、ホライズンと認定される時期はどのような状況にあったのかである。

アンデスの諸文化の展開を見てみると、後期ホライズンに対応するインカ帝国や中期ホライズンの主要社会の１つであるワリ帝国は、それよりも前の形成期や地方発展期の大規模遺跡が位置する地域ではなく、後進地域から台頭した。形成期から大規模社会が断続的に展開したペルー北海岸、中央海岸など、中央アンデス北部において最後に台頭したのはチムー王国であった。インカとチムーの戦いは、インカ帝国台頭プロセスにおける最大の戦争であり、もしチムーが勝利していたらアンデスの歴史は別の形になっていたであろう。そして、アンデス的特徴と現在我々が認定しているものの内容は多少異なっていたであろう。

インカの特徴が、先インカ期の諸文化にも認められる場合、アンデス的特徴として説明できる。逆に、インカにしか認められない特徴はむしろインカの個別性を示すと解釈できる。ここではインカ帝国を基準としてアンデス的特徴と考えられる点をまず考察し、可能な場合、それが中期ホライズンのワリ、ティワナク、そして北海岸のチムーに認められるかを確認するという手順で議論を進めたい。インカ帝国期に集成されるアンデス的特徴は当然ながら、最初から全て揃っていたわけではない。それらがどのような経緯で成立したかを考えるためには、それよりも前の時代と比較することが必要である。時代によってそのレパートリーが違っているこ

とは当然であろう。

4．アンデス的特徴

アンデス的特徴とされる文化要素はいわば外側から見える形であるが、それらを生み出す構造、仕組みこそがアンデス性を示している。ここでは考古学の指標となる物質文化の特徴を考えるための諸側面についてまとめてみたい。

4-1. 垂直性・自給自足

ジョン・V・ムラはインタビューの中で、アンデスの重要な特徴として垂直性を挙げ、1 つのシステムに異なる環境帯の要素を組み合わせていることがアンデス的特徴だと語っている［Castro *et al.*, eds. 2000: 140］。垂直統御モデル、環境の補完性モデルを提示し、アンデス研究の一時代を築き上げたムラの答えとしては当然であろう。ムラの示した環境の補完性のモデルは、同一集団が多様な環境を多角的に利用し、自給自足を志向する仕組みを説明している［Murra 1972］。アンデスでは狭い範囲に多様な環境が徒歩で移動できる比較的狭い範囲内に隣接するため、それぞれの環境帯で栽培できる生産物に特化し、それぞれの生産物を他の環境帯の人々と交換するという仕組みは生まれなかった。1 つあるいは比較的少ない環境帯に 1 つの文化が大まかに対応する旧大陸の事例とは、多様な環境が認められるアンデスの事例は確かに異なる。

垂直性は所与の環境条件であり、正確にはそれを利用した、それに適応した社会文化形態こそがアンデス的特徴である。いわばモノを動かすのではなく、人を動かすのが環境の補完性の特徴である。アンデスでは物々交換は生活レベルではあまり発達せず、そのため市場はなく、交換の媒体としての金属貨幣も発達しなかった。アンデスの特徴としてしばしば強調されるのは、文字の欠如であるが、音を示す記号である文字が生み出されなかったのは、人間の身体で行う労働を他の方法で代替する、あるいはものの価値を他の物質で示すという発想がアンデスでは希薄であったことと整合的である。

インカ帝国においては、行政単位が設定され、それぞれに民族集団が対応する。そしてムラが示した垂直統御モデルの事例は、ルパカ族などインカ帝国の支配下の民族集団単位であった。民族集団内では自給自足経済が志向されたが、同時に国家の政策で、他の地方に移動させられた集団もあった。それはミティマエスと呼ばれる。それは文書記録を基に全人口の 4 割にもなるという試算がある［ダルトロイ 2012: 143］。ただし人間が大規模に移動させられたことを考古学的にどのように検証するかが課題となっている。

インカ帝国については、植民地時代に残されたチンチャに関する史料を根拠に、先スペイン期にも海岸地帯に商人が存在したという説が出された［Rostworowski 1989[1970]］。たしかに史料には、「商人（*mercaderes*）」という単語が出てくるが、スーザン・ラミーレスは、首長の指示で物資を運ぶ仕事に従事していた人々をスペイン人が商人と呼んだのであろうという［Ramírez 1982, 2007］。つまりアンデスでは、物々交換によって利益を得るような商人がいたという証拠はこれまでない。それは貨幣が存在しなかったということと平行している。では一体、アンデスにおける物資の移動はどのようにして行われたのか。ムラは市場経済によらない経済システムを説明するため、互酬と再分配という概念を導入した［Murra 1980[1955]］。しかしアンデス経済の特徴を説明するためには不十分であり、議論をさらに展開する必要がある。

ポイントの 1 つは、スポンディルス貝や黒曜石など、遠隔地から入手される物資である。スポンディルス貝については、それが主にエクアドルの暖かい海に生息することが知られるが、どのようにそれが他地域に伝わ

るのかは十分に説明されているわけではない。黒曜石の原産地にせよ、スポンディルス貝の生息地にせよ、そこに複数の民族集団が共存していたという多文化の証拠はないため、それらを各集団が自給自足で獲得したとは考えられない。また、ペルー北部の形成期の神殿クントゥル・ワシの墓で、ボリビアでとれたソーダライトという石が出土している［Kato 2014］。しかし、その事実が分かっていたとしても、どのようなメカニズムでボリビアからペルー北部まで石が運ばれたのかは説明されていない。黒曜石、ソーダライト、スポンディルスなどは主に儀礼的コンテクストで発見されており、儀礼的な意味を付与されたものとして理解されている。しかし、遠隔地までどのようなルートで移動するのか、物資の移動、交換、交易のメカニズムを明示的に説明する枠組み、いわば説明の補助線が現在の研究レベルでは欠けている。

説明を明確化するため、便宜的に経済活動を生業経済（政治経済）と儀礼経済と分けると、ムラが説明してきたのは主に前者の仕組みなのである(註2)。しかし、生業経済と儀礼経済の区分は明瞭ではなく、両者は連続的に接合している。例えば垂直統御モデルにおいて、比較的遠隔地まで取りに行くことにこだわるのは、コカや、チチャのためのトウモロコシなど儀礼に関わるモノが多い。またムラが織物などを取り上げ、儀礼経済の一部を考察していることも確かであるが、さらに研究を進める余地がある［Murra 1962］。この研究の間隙を埋めることが出来れば、アンデスの経済システムの特徴をより総体的に、おそらくその二重性あるいは重層性を記述できるであろう。

4-2. 富・土地・労働力

市場や貨幣が発達しなかったということと、アンデスにおける富の概念の間には関連がある。インカの時代には、貴金属などがそれ自体で価値を持つことはなかった。富の源泉は人間であり、労働力であった［Ramírez 2005］。アンデスではモノそれ自体が重要ではなく、それによって紡ぎ出される人間関係こそが重要であったと言える。例えばケーロを事例とすれば、ケーロは 2 つ 1 組で用いられ、それで酌み交わすことで関係性が生まれた［Cummins 2002］。

モノそれ自体が価値を持つわけではないということに関連して、土地の概念がある。アンデスでは土地の所有という概念が存在しなかった［Ramírez 1996, 2005］。あったのは土地の用益権のみであり、人間が労働力を投下して栽培した作物や飼育した家畜を所有することはあっても、土地そのものを所有することはなかった。つまりモノではなく人間を基準に考え、何かを作り上げる労働こそが重要であった。そのため植民地時代にスペイン人と先住民との間に土地をめぐる問題が生じた。アンデスでは聖なる存在ワカが信仰の対象であった。日本の神道の八百万の神に類似し、主要なワカは山、岩、泉、川の合流地点など自然の地形であった。アンデスの人々にとって、聖なる存在ワカそのものから構成される土地を所有するという発想自体がなかったのである。

アンデスは、荘厳な建築や、織物や土器など見事な作品が数多く作り出されたが、それらを所有すること自体は富に結びつかなかった。形成期やモチェ文化の黄金製品は、それを持つ人の社会的役割を示し、あるいはワカへの捧げ物として位置づけられる。そしてそれらの製品を作り上げるのに累積された労働力の量こそが重要であった。

ヨーロッパの文化ではできるだけ、効率よく、かつ人間の力を使わずに成し遂げることが重要であった。人類学者の川田順造は、日本の技術の特徴を西洋の状況と対比させ、二重の人間依存と評価する［川田 2010］。それは機能別に様々な道具を作り出すのではなく、人間が 1 つの道具を使いこなして様々な作業を行い、そして動物や自然の力を用いて効率よく作業するのではなく人間が時間をかけて行うという特徴を指している。こ

の特徴はアンデスにも当てはまるが、アンデスと日本では、古代文明すなわち大規模な複雑社会が独自に生まれたかどうかという点に違いがある。ヨーロッパ、あるいはその基層文化の 1 つである西アジアなどでは、人間の労働を出来るだけ他の方法（道具や動物）で代替する技術が発展した。それは 1 人の人間の力を何倍にもする仕組みであった。一方でアンデスは人間の労働力にこだわった、等身大の文化であると言える。二重の人間依存のシステムから文明と呼ばれるような複雑社会が生み出される仕組みを考えることが、アンデス文明の特徴を理解することに繋がる。

インカ帝国では貨幣経済が発達せず、税は労働税が基本であった。成人男性が基準となり、その数が行政の単位となり、キープに記録された［Urton 2003, 2017］。そして納税は物資で納めるのではなく、労働で納めた。徹底した人間中心的な考え方がアンデスの特徴である。しかし互酬と再分配という概念は、市場経済に基づかない経済活動の仕組みを説明する概念として有効だとしても、アンデスのような巨大な政治組織が機能する仕組みを理解するには不十分である。量的な説明不足については、互酬や再分配の重層性、あるいは入れ子状構造というモデルによってある程度説明できるであろう。しかし質的な説明も不足している。先述したように、生業経済と儀礼経済と分けるとすれば、足りないのは後者についての説明である。次にこの点について考えてみたい。

4-3. ワカと儀礼

人間中心性がアンデスの特徴だとして、もう 1 つのポイントは儀礼中心性である。インカ帝国の首都クスコの中心に位置するコリカンチャのような神殿を作り上げるメカニズム、遠隔地から物資を取り寄せる仕組み、緻密な織物や華麗な金属製品を入念に作り上げること、そして労働力の根源である人間自身を生け贄として捧げること、など儀礼的行動にアンデスの特徴が顕在化する。それらの行為は儀礼的に意味づけられ、大量の労働力が動員され、政治的に利用される。インカの建築の石組みは大量の労働力を用い隙間なく組み合わさるように加工されている。ペルー北海岸中心の金属製品製作にも多くの人間が携わり、砂金を集め、息を吹き込んで温度を上げ、時間をかけて加工した。儀礼と結びついた物質性がアンデス的特徴を読み解くのに鍵となる。

アンデス世界はワカと呼ばれる聖なる存在によって構成された世界である。ワカとは、岩や泉、山など自然の地形そのものであった。フランク・サロモンは「超人間的なものが現れた物体（any material thing that manifested the superhuman）」と説明する［Salomon 1991: 17］。アンデスにおいては、精神と身体というような分離が想定されず、ワカについても同様である。ワカという形のない抽象的な存在が自然の中に宿る、と考えたのではなかった。つまり、ワカは物質そのものであり、アンデスの人々は、ワカという存在と自然の地形の分離を前提としなかった。自然の地形そのものがワカであり、ワカとして見出された対象に働きかけることによって、ワカは作用する。それを説明する概念が、カマイ（*camay*）である。カマイは「あらゆる物質的存在を活性化させる超自然的なものと考えられ、その超自然的な原型としてカマクがあるとされていた」［カミンズ 2012: 222-223; Taylor 1976］。

カマクについて、例えばインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガは次のように述べている

「パチャカマックは『全世界、宇宙』を意味するパチャ（*Pacha*）と『霊魂』を意味する名詞カマ（*cama*）から派生した『生命を吹きこむ』という動詞カマ（*cama*）の現在分詞カマック（*camac*）が合してできた語であり、従って、『宇宙に生命を与えるもの』といったほどの意味であるが、その本来の完全な意義を言えば、『魂が肉体に対して為すところを宇宙に対して為すもの』となろう。」［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1985[1609]: 102］。

サロモンが指摘するように、ワカとは何か抽象的な存在を物質化したものではない。また、トム・カミンズはカマイの説明に「超自然的」という形容詞を用いているが、ワカは「超自然的」ではなく、「超人間的」存在と説明するのが適切である。自然と文化を対立的に考える西洋とは全く異なり、アンデスではワカの世界こそが自然の世界であるから、自然を超えることは想定されない。加藤泰建［1992］やジョン・ジャヌセク［Janusek 2015］も「超人間的」という語を用いているが、アンデスの聖なる世界を記述するにはより適切である。

またワカは超人間的存在が現れた（manifest）もの、あるいは体現（embody）したものであり、表象（represent）したものではない［*cf.* Janusek 2015: 340］。「表象」を表す represent は「再提示」とも訳されるが、ある対象を別の形に置き換え表す行為である。ワカとは、何か非物質的なものがはじめにあり、それを物質化したものではない。つまり、ある対象とそれを表したモノという分離の関係があるわけではない。またジャヌセクは「大地の（telluric）」という単語を用いているが、ワカの特徴を記述する言葉として整合的である［Janusek 2015: 338, 356; Janusek *et al*. 2013］。

物質と儀礼の関係性を理解するための事例をいくつか取り上げてみよう。メルセス会の修道士マルティン・デ・ムルーアのクロニカには、インカ王が岩を遠隔地まで運ばせる様子が描かれている。それはインカ王の権力を示す事例として扱われ、実際にクスコ近郊からエクアドルまで石が運ばれたことが考古学的証拠に基づき実証された(註3)［Ogburn 2004］。

この絵について石を運ぶ際に説明の枠組みとして、カミンズはカマイという概念に注目する。カマイについては「どんな自然状態の内にも宿っている潜在力であり、それは聖性の理念的なあらわれとして理解される」［カミンズ 2012: 222］、そして「大きな石が意思と生命を持っており、自身のためにそれを行使している」［カミンズ 2012: 222］と説明する。つまりカマイとは人間以前に存在しているのであり、人間はそれに働きかけるのみである。

ガルシラソ・デ・ラ・ベガは同様に、「疲れ果てた石」について述べている［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 267］。人間が運べなかった石ではなく、疲れ果てたのは石であるから、石自体に主体性が認められており、それはカマイという概念で理解すべき特徴である。アンデスでは人間が飼い慣らす対象として自然を見ていないため、擬人化という概念で説明するのは不適切である。人間は自然の一部である。

アンデスにおける物質性の根幹をカマイという概念を用いて理解すれば、我々が現在アンデスの特徴として認識する物質文化を理解する助けとなろう。あらゆる素材は自然状態の中に存在する。それに人間は手を加え、様々な作品を作り上げる。しかしながら、より正確に言えば、物質そのものにすでに方向性が内在しているのであり、人間はその動きにエスコートするだけである。アンデスにおいて物質は人間が操作し対象化し飼い慣らす対象とは認識されなかったのである。

4-4. 作られた仕事と時間

エクアドルの石に関しては別の視点からの解釈も可能である。石を運ぶことに関して、デニス・オグバーンは、それが「作られた仕事（made work）」だという［Ogburn 2004: 435; Rowe 1946: 268］。つまり、わざわざ労働を生み出すことに特徴がある。何か必要であってそれに応じてなされる労働ではなく、労働自体が自己目的化している。それは、労働を課すことで、人々の時間をコントロールする仕組みであった。

わざわざ労働を作り出す仕組みについて、もう 1 つ事例を挙げてみよう。ガルシラソ・デ・ラ・ベガの記録の中に次のような一節がある。

「われわれが気の毒な弱者と呼ぶ身体の不自由な者たちは、別の形で貢税を納めていたが、それは定められた期間内に、シラミのつまった一定数の葦の管を、居住地の司令官に提出しなければならない、というものであった。インカ王たちがこんな貢物を求めたのは、（納税を免除されている者以外は）誰もが、たとえどんなに気の毒な境遇にある者でも、納税の義務を果たすという習慣を徹底させるためであり、それゆえ、身体が不自由なため、皆がやっているような、労働による奉仕のできないこうした人びとには、シラミでその代わりをすることを求めたのだと言われている。」［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1985[1609]: 397］

集められたシラミは一体何を表しているのであろうか。それは何も意味がなく、何にも使えない。衛生状態を保つために集めさせているわけではない。インカ王にとっても富の根幹はモノ自体ではなく、人間、労働力であった。ノミを集めさせたのは、ノミ自体が重要であるからではなく、あらゆる人が働いている状態を保つためである。できるだけ効率よく仕事をこなすということではなく、できるだけ全ての人間を、労働している状態に保つことが重要なのである。換言すれば、それは臣民の時間をコントロールすることとも言える。それは、インカ帝国において、パチャクティ王以降、トパ・インカ・ユパンキ、ワイナ・カパックと常に拡張を続け、戦争自体が自己目的化していたこととも平行関係にある。常に労働している状態、つまり動の状態を保つことこそが重要であり、アンデスにおける安定性は、静態的な状態としてではなく、動的な平衡状態として理解できるであろう。

同様のメカニズムは、インカ帝国の他の特徴にも現れている。しばしば指摘されることであるが、インカ王は前王の建設した建物や開墾した畑などを相続することはできなかった。ペドロ・デ・シエサ・デ・レオンは次のように述べている。

「彼らの追憶は大いに尊重されたので、そうした偉大な王のひとりが死ぬと、その息子自身には、支配権[註 4]以外のものを引きつぐことは認められなかった。なぜならば、彼らの間では、クスコの王であった者の富や王室の豪華な品々は、他の者が所有してはならないことになっていたし、彼の記憶は保たれねばならない決まりであったからだ」［シエサ・デ・レオン 1979[1553]: 59］。

インカ王は即位時にパナカという親族集団を創設し、パナカはインカ王の死後も存続しミイラと財産を管理した。そのため前時代のパナカの成員を新しいインカ王が臣下として受け入れることはできなかった。したがってインカ王はゼロから、建物を建て、畑を開墾し、そしてパナカのメンバーを集めなければならなかった。こうした仕組みをジェフリー・コンラッドは「分割相続（split heritage）」と呼び、この習慣こそがインカ帝国拡張のメカニズムであるとした［Conrad 1981; Conrad and Demarest 1984］。さらに分割相続という概念を援用して、インカ以前のチムー、ワリの拡張の背景を説明しようとした。解釈の妥当性はともかく、新王が前王の財産を引き継ぐことができないということは、新しく仕事を作り出すという意味で、インカ社会の他の側面と整合的であることは確かである。

4-5. 宮殿と神殿

インカ王が前王の財産を相続できなかったという点を、インカ王の宮殿を事例として、より掘り下げて考えてみたい。2004 年に編集された本の中で、ジョアンヌ・ピルズベリーは、宮殿という概念が西洋的で、アンデスには当てはまりにくいことを示唆している［Pillsbury 2004］。

ある大遺跡において、一体どの建物が宮殿か、という問いはしばしば、そもそも王のような支配者が生活する建物は立派であるという前提に立っている。しかしながら、そうした想定通りに宮殿を特定できないため、アンデスにおいては宮殿という概念を当てはめるのは不適切だと考えたくなる。しかし王が特定の建物で生活するのであれば、それは宮殿と同じ意味であるし、またクスコには特定の王様に結びつけられる建物は実際にあった［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 189-193］。アンデスには宮殿が存在しないわけではなく、アンデスの宮殿の性格はヨーロッパやアジアの宮殿とは異なるのである。

ガルシラソ・デ・ラ・ベガは、クスコ内を記述する際に、各王の宮殿について述べている［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 174-199］。言及されているのは、マンコ・カパックの宮殿、インカ・ビラコチャの宮殿、インカ・ユパンキの宮殿（ハトゥンカンチャ）、トゥパック・インカ・ユパンキの宮殿（プカ・マルカ）、インカ・ロカの宮殿（コラコラ）、インカ・パチャクテックの宮殿（カサーナ）、ワイナ・カパックの住居（アマールカンチャ）である。しかし実際どの建物とどの王様が結びつくのかについては、独立した他の史料による検証が必要である。

インカ王の宮殿についての別の情報は、イエズス会の神父であったベルナベ・コボが記した『新世界史』の中にあるセケ・リストに含まれている［Cobo 1964[1653]: 169-186; 渡部 2010］。セケ・リストは、他の記録者の記述をそのまま写したものと考えられている［Bauer 1998; Zuidema 1964］。それによれば、クスコは太陽の神殿から放射状にセケと呼ばれる概念上の線が延びており、その線はワカを結んでいるという。逆に説明すれば、ワカを結んだ線がセケである。ワカは実際には自然の地形であるから、セケはまっすぐではなく、ジグザグに曲がっている。セケ・リストでは各ワカが何であるかが説明され、またワカに関連した情報が含まれている。その中に特定のインカ王やその親族などの建物の情報があり、例えばパチャクティ王に関係する建物は複数ある。多くは「家（*casa*）」という単語で記されているが、「宮殿（*palacio*）」という単語が使用されている箇所が一カ所ある[註5]［Cobo 1964[1653]: 172］。

クロニカの記述から、特定の王に関係する建物が別々に存在したことが分かる。ヨーロッパの宮殿や日本の城のように、歴代の王、領主が代々同じ建物を相続するわけではない。そのため、相対的にその規模は小さい。また、各王が複数の建物を建設させ、管理しているということも分かる。つまりアンデスでは、宮殿という概念を使用するのが不適切なのではなく、宮殿の規模や荘厳さが 1 つの建物に集中するヨーロッパやアジアの事例とは異なり、各王が宮殿に値する建物を複数建設し、それぞれ分散して配置されていることが特徴なのである。宮殿は一極集中するのではないため、権力を示す効果は乏しい。そもそも富を物質で表すことは一般的でないアンデスの場合、宮殿は、権力を直接物質で表したもの、あるいは王の身体が物質化したものではなく、あくまで労働力が転化した結果と説明する方が適切である。実際セケ・リストでは、建物自体がワカとして言及されているため、王様と結びつけられるとしても、それはカマイによる働きによると理解されていたであろう。

インカ王の主要宮殿については、クスコの中核部であるサプヒ川とトゥリュマヨ川の間の場所に、各王が 1 つずつ所有していたと考えられている。また各王は死後もミイラとなりパナカに保管されたが、各パナカは特定のセケに対応し、各王の宮殿やミイラを管理した。セケ・リストにはどのパナカがどのセケを管理していたか、またそのセケが 4 つのスユのうちどこに属するか記されているため、各王のスユへの帰属が確認できる。また帝国各地からクスコに来た民族集団も 4 つのスユの方位に従ってクスコ内に居住したという［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 182-183］。マルッティ・ペルシネンは、クスコの中心部の 4 つのスユの空間区分と宮殿の位置を図示した［Pärssinen 1992; 渡部 2010］。この解釈は各王のパナカが属するスユの範囲内に主要な

宮殿も位置していたという前提に立っている。しかし、ペルシネンが依拠したクスコの地図には宮殿の位置を特定する元情報と導き出すプロセスが明示されていない［Agurto Calvo 1980］。そのため、宮殿の位置の同定に関しては、今後再検討の余地がある。

さてインカ帝国の首都クスコについて、もう 1 つ重要な特徴に注目したい。クスコの中心にあり、最も荘厳な建物はコリカンチャ、すなわち太陽の神殿である。宮殿よりも規模は大きく、荘厳である。アンデスにおいては大規模な神殿が存在することは、形成期の事例からも理解できる。アンデス文明は神殿から始まったのだ、という泉靖一の文言が日本ではしばしば引用されるが［泉 1966］、そうした神殿中心的な特徴はインカ帝国の首都クスコにも認められる。従って、神殿中心という特徴は形成期とインカの間の時代にも存在すると想定するのは一見妥当であるように思える。

インカの首都クスコの特徴が、チムーにも見られるか考えてみよう。チムーの首都チャンチャンは、中心部にシウダデーラと呼ばれる建築単位が 10 個集中している構造である［Moseley & Day, eds. 1982］。インカをモデルとして、それぞれのシウダデーラは歴代の各王に対応する王宮であると考えられている［Day 1982; Kolata 1982］。また各シウダデーラ内あるいはその外側に付随する形で埋葬用と考えられる建造物がある［Conrad 1982］。ただし埋葬用建造物はいずれもひどく荒らされており、王の墓であったと証明できているわけではない。そしてそれらのシウダデーラは 1 つずつ建設された、あるいは 2 つずつペアとなって建設されたと想定され、その建築の編年案が提唱されている［Cavallaro 1991; Kolata 1982］。歴代の王様に対応する建物が別々にあるという状況は、確かにチャンチャンとクスコの間の共通点のように思える。しかしチャンチャンとクスコの間には違う点もある。まず、シウダデーラは、インカの首都クスコ内における宮殿と同定されている建物よりも面積が広く非常に大きい。また、クスコの中心には最大の建物である神殿があるが、チャンチャンの中心部に神殿と同定されている建物が位置するわけではない。そもそもチャンチャンのどこが中心かは不明瞭である。

次にインカの祖型とされるワリについて考えてみよう。ワリ帝国の首都であるワリ遺跡の設計は不明瞭である［Isbell 2004］。ここでの議論の対象となる王に関連する建造物の候補としては、平面形が D 字形の構造物がある［Cook 2001, 2015］。D 字形構造物はワリ遺跡内に複数あり、さらに地方行政センターの中にもいくつかある。それはワリの典型的な建物である直交する細胞型の建築構造［Isbell 1991］とは異なり、不規則構造が集合するセンターに伴うものである［Cook 2015; 渡部 2014］。仮に歴代王に関連する建造物、例えばミイラを保管する建造物だと想定すると、なぜ地方センターにもあるのかがうまく説明できない［Isbell 2004］。D 字形建造物ではない別の建物が宮殿である可能性もあるが、それらはこれまで発掘調査で確認されていない。インカをモデルとして宮殿が複数存在すると仮定しても、ワリ遺跡では肝心の中心となる神殿の存在が不明瞭である。モラドゥチャユフ地区に、半地下式広場が埋まっていることが確認されたが［Isbell *et al.* 1991］、その上に目立つ神殿が建っているわけではない。

そのため、クスコ、インカ帝国の特徴をアンデス的特徴として一般化し、チムーやワリなど先インカ期に当てはめようとしても、当てはまらない部分が出てくる。首都において宮殿（王宮）が複数存在するということは共通点であるが、神殿の位置づけなどは相違点である。アンデス的特徴を論じるにはアンデス諸文化の共通点に着目する必要があるが、ではアンデス諸文化間の相違点をどのように扱うのかは別の課題として残されている。

4-6. 都市と専業化

インカ帝国の地方支配のために設置された行政センターは、建物が集中し、表面的には西洋的な都市に類似している。しかし人間が一時的に集まることはあっても恒常的に住む場所ではなかった。同様に先スペイン期の大規模遺跡の多くでは集住傾向は弱かった。アンデス高地では、人々は分散して生活しているのが一般的であり、集住の傾向は弱い。アンデス高地にある町は16世紀に始まるレドゥクシオン政策の結果設置されたものが多く、先スペイン期から連続的に利用されてきたわけではない。先スペイン期アンデスの都市について、クシストフ・マコフスキは、ヨーロッパの都市を「都市化（アーバニゼーション）」という概念で説明するとすれば、アンデスの場合はむしろ「反都市的」な特徴が認められるという［マコフスキ 2012］。確かにアンデスの大規模遺跡には西洋の都市とは異なる特徴がある。

地方発展期以降のアンデスの大遺跡の多くは数百年単位で存続した後、放棄されたため(註6)、より長期で存続するヨーロッパや西アジアの都市とは確かに異なる。一方で東アジアの都市は、都城とも言え、王朝の崩壊とともに放棄されたことが知られている［藤本 2007］。アンデスの大規模遺跡の場合も都城と同じように、王朝の盛衰と平行して建設、放棄されたように見える。しかし、都城が王を中心とした設計であるのに対し、アンデスの都市的遺跡では先述したように、宮殿、王宮が複数あり分散しているのが特徴である。インカ王の宮殿が位置するクスコは、アンデスにおける都市の一例であり神殿が中心にある［*cf.* Rowe 1967］。つまり、西洋の都市や東アジアの都城は人間中心的であるのに対し、アンデスではワカ、儀礼が中心である。そして、儀礼のあり方と政治体制が密接にリンクしているため、王朝の崩壊とともに神殿を中心とした大遺跡も連動して放棄される。アンデス世界の基幹にあるのはワカであるが、王をはじめとする人間は出自や権力などを正当化するためにワカにすがり、ワカを意味づけたのである。

インカ帝国においては、多くの人間が集まって生活する場として、研究者が「王領（royal estate）」と呼ぶ、特定の王様に関連する遺跡群があった［ナイルズ 2012］。例えばマチュピチュ遺跡はパチャクティ王の王領であったとされる［Salazar & Burger 2004］。王領には王様に仕える人々が生活していたと想定される。しかし、王領は出自や役割の異なる種々雑多な人々が恒常的に生活する都市のような場所ではなく、特定の集団が生活する場であった。そして王の死後も、王領は王に仕える特定の集団によって管理された。

都市のあり方と関連づけて、工芸品製作の専業化についても考えてみたい。考古学では専業化のあり方を説明するため、独立生産（independent production）、従属生産（attached production）という枠組みが用いられることが多い［Costin 2001］。アンデスでは、工芸品製作が盛んに行われたのは、中央集権的な社会が発展した時期においてであるため、従属生産の性格が強いように見える。とくに考古学的に検証しやすい土器にはこの特徴が顕著に認められ、多くの大規模社会では精巧な土器が製作された。インカ王による労働税の一部として工芸品製作活動は行われ、製作されたものは王によって下賜され政治的に利用された。しかし、先述したように、工芸品製作もカマイという概念により儀礼的に意味づけられており、一義的にワカに捧げるために製作される工芸品もあるし、それが政治的に転用される場合もある。「従属（attach）」している対象は、王というよりも、王の力の源泉であるワカであり、それを媒介するのが政治的権力である。

インカ帝国においては大量の土器が製作され、アリバロスと呼ばれる尖底壺が頻繁に出土する。それはお酒を入れる壺であり、儀礼に用いられた。そしてインカ王は酒を臣民に振る舞った。酒を入れる壺が最も装飾的であるのは、アンデスの他の社会でも同様であり、チムー、モチェ、形成期の鐙形土器、長頸壺、パラカス文化やナスカ文化の橋形把手付き双注口壺などの事例を挙げることができる(註7)。一方で、ティワナク文化では、装飾的な土器の代表は壺形土器ではなくコップであり、ワリ文化では装飾的コップ形土器のほか、酒を入れる

ための大型の広口鉢や壺も製作された。

アンデスの大規模社会の多くでは酒に関する土器が装飾的であるという大まかな共通点がある一方、その出土傾向には違いがある。例えば、インカ様式土器は多くの遺跡で大量に見つかるのに対し、ワリ様式土器はむしろ少数である［渡部 2014a］。ワリとインカを比較すると、インカ様式土器は遺跡間で共通性が高いのに対し、ワリ様式土器は同一遺跡内で他の様式の土器と差異化されるという傾向がある。インカ様式土器はより儀礼的で、共通性を示すのに対し、相違性を示すワリの土器は民族集団の識別などに用いられた可能性がある。また、コップはインカ文化では土器よりも木製や金属製が多く、ワリでは土器が主流であるため、土器を単独で扱うのではなく、一連の物質文化の 1 つとして考える必要がある。

以上のように、インカをモデルとしてアンデス的特徴を一般化することは、条件的に問題がある場合がある。カマイなど、物質文化を生み出す根本的特徴、構造が同じだとしても、そこから生み出された物質的現れは表面上異なる特徴、異なった形を示すこともある。この点について、アンデスの祖先崇拝、墓を事例として考えてみたい。

4-7. 墓とミイラ

インカ王の墓はさぞかし立派であろうと考えられるが、インカ王は荘厳な墓を作らなかった。死後はミイラとなって、儀礼の際に担ぎ出された。この特徴は、インカでは立派な宮殿を建て、それを歴代の王様が継承することはなかったということと整合的である。ミイラ製作をしてそれを保管するということは、労働力の源泉である身体を究極的な形で示す方法とも言える。

ではインカ王以外の人々はどうであったのであろうか。インカ帝国の山地では、人々はミイラとされチュルパと呼ばれる塔状墳墓、あるいはマチャイと呼ばれる洞窟に安置された。海岸地帯ではミイラは地下に埋葬された。リマにあるプルチュコ遺跡などがその例である［Haun & Cock 2010］。

チュルパはワリ期とインカ期に共通する特徴である。チュルパは遅くともワリ期にはペルー北部高地で出現した［Watanabe 2014b］。さらに地方発展期まで遡るという意見もある［Isbell 1997］。チュルパの平面形は方形または円形であり複数階のものもある。入口が 1 つあり、多くは東に開いており、そこからミイラを出し入れできる。内部には複数のミイラが安置されたため、チュルパは一種の集合墓であった。土着の首長などの個人の荘厳な墓はなく、またチュルパの中のミイラが副葬品などで差別化されている証拠は希薄である。しかし、チュルパの大きさ自体には差があり、そこに入るミイラの数はチュルパが大きければ多くなる。従ってチュルパがアイリュ（共同体）などの集団ごとに使用されていたのであれば、その大きさは単位集団の規模に比例することになる。そして間接的に、集団を統率する首長の権力の大きさを示すと見ることもできる。しかし、単独のチュルパではなく複数のチュルパに分散させて安置する可能性も考えられるため、チュルパの大きさのみで共同体の規模を想定することは難しい。全体的な傾向としては、インカ帝国では、王や首長が、墓の大きさや副葬品など物質で差別化されるという発想自体が希薄である。

ウィリアム・イズベルは、アンデスの基本的単位であるアイリュの起源とチュルパを関連づけて論じた［Isbell 1997］。その時にやり玉に挙げられたのはマイケル・モーズレイなどである［Moseley 1992］。イズベルの主張によれば、アンデス社会の基本単位であるアイリュの基本的特徴が祖先崇拝だとして、その物質的根拠を示さずに、例えば墓があったからといってアイリュの起源を前 2000 年まで遡らせるのは不適当である。祖先崇拝の物質的特徴は、チュルパと呼ばれる地上式塔状墳墓にミイラを安置する習慣が始まってからだという。

祖先崇拝のあり方は何もチュルパと呼ばれる墳墓に限定されるわけではないので、イズベルの主張をそのま

ま受け入れることは難しい。しかしながら、物質的な根拠を示さず、自分が見たい形に過去を再構成しているのではないか、現在の姿やインカ期の姿をそのまま過去に投影しているのではないかという批判は肝に銘じるべきであろう［Isbell 1995］。つまり、アンデス的特徴をアプリオリに設定し、頭の中においておくと、それを無批判に過去に投影しがちになる。そして、そもそも祖先崇拝は世界で遍く認められるのであるから、それをもってアンデス的特徴ということはできない。チュルパを事例として、アンデスの埋葬の一般的特徴を記述するにはまだ整理が足りないように思われる。

インカ帝国において権力を大きな立派な墓で示すという発想が希薄であったということは、宮殿と同じである。しかし先インカ期では、例えばチムーなどにシウダデーラに付随して埋葬用マウンドがあり、モチェ文化やシカン文化のように豪華な副葬品を伴う墓もあるため、立派な墓がないわけではない［本特集の松本論文を参照］。こうした墓について、墓が発見された建物が一義的に埋葬用であったのか、墓が建物のどの位置にあるのか、墓のある建物が他の建造物と比較してどのような特徴があるのかなど検討するべき点は多い。

4-8. アンデスの図像表現

次に墓との関連で、人物表象の問題を考えたいと思う。まずインカ王の図像が描かれなかったことに注目したい。先に、ワカについては超人間的存在を体現したものであり、表象したものではないことを述べた。一方で、人間や動植物の図像表象は多く存在する。

古代アンデスでは様々な造形表現が生み出された。しかし、土器などの造形表現にあまり重きを置かない文化も存在した。例えばペルー北高地のワマチュコ文化は荘厳な建築物で知られているが、図像表現、造形表現は少ない［Topic & Topic 2001］。そして造形表現が発達した文化では一般に人物表現が盛んであるが、例外もある。例外の 1 つがインカ文化であり、人物表現は極端に少ない。インカ期に描かれたインカ王の図像や立像はこれまで確認されていない。現代の研究書でしばしばフェリペ・グァマン・ポマ・デ・アヤラの挿絵が引用されるが、それは 17 世紀初めの植民地時代のものである［Guaman Poma 1987[ca.1615]］。インカ王の図像表現が何らかの形で残存しており、それを基にグァマン・ポマが描いたのか、あるいはそもそも図像はなかったが、インカ王のイメージを作り上げて新たに作成したものかは分からない。しかし、グァマン・ポマの絵の中の各王のウンク（貫頭衣）にトカプと呼ばれる四角い紋様が織り込まれていることから、全てが創作ではなく、物質的に残っていた情報も含まれていると考えられる。

一方で、先インカ期のモチェやナスカ、ワリやティワナクなどの文化は、人物表現が豊富であった。従って、図像表現の何をアンデス的かと論じるためには、人物表現にまつわる諸要素を総合的に判断しなければならない。つまり、人物表現の有無や多寡のみでは、アンデス的特徴を抽出するには不十分である。インカ帝国をアンデス文明の集大成と位置づけ、インカ帝国にアンデス的特徴が収斂してきたと見るならば、どのようにして人物表現が減少していったかを考えるべきであろう。

アンデスは、富の概念などから分かるように、人間の身体にこだわる文化であった。そして身体を代替するという発想が希薄であったからこそ、身体を直接的に示すミイラ製作は積極的に行われ、ミイラと祖先崇拝が結びつき、アンデス社会の根幹を形成した。一方、巨大な宮殿や墓を作ることにはあまりこだわりを見せなかった。アンデスの人物表現を整理するためには、墓の特徴、ミイラの位置づけに着目することが有効であろう。

人物表現の希薄であったインカ帝国ではミイラ製作が行われ、チュルパに安置されたが、豪華な副葬品を伴う大規模な墓はなかった。インカ王の図像を描く習慣がなかったため、インカ王の視覚的情報はミイラに一極集中することになった。インカ王のイメージは、むしろ見られるよりも語られて流布していったと言える。一

方、モチェやシカンでは、豪華な副葬品を伴う墓が作られ、ミイラはいったん墓に埋められた後は見られることはなく、王など重要な人物のイメージは、盛んに描かれた図像などを通じて広まった。

4-9. 新世界の双子

次に、人物表現を別の視点から分析するため、図像表現の背景にある規則について考えてみたい。

2 個 1 組で使用するケーロの例が示すように、アンデスの物質文化の 1 つの特徴は、あるもの自体で何かを意味するのではなく、複数のものを用いて諸関係を示すことにある。そのため無文字社会アンデスの図像分析では、個々の意味や人物を同定するような意味論的分析よりも、図像表現の規則を分析する構造分析が有効である［渡部 2010］。

構造分析の基本となるのは二項対立である。男と女、右と左、といった二項対立やデュアリズムはホモ・サピエンスに共通に認められるので、アンデス的特徴とするには他の社会と差別化する基準を示す必要がある。アンデスのデュアリズムの特徴は、ヤナンティンという、2 つのものが一緒になったことを示す概念で説明される［Platt 1986; 本特集の土井論文を参照］。そして 2 つの関係を表すのに鏡のメタファーが用いられる。また 2 つペアであるはずのモノのうち片方が欠如した状態は、チュリャと呼ばれる［渡部 2010］。

アンデスにおいては男の双子が不吉とされるが、その片方が雷の子とされ、神官にふさわしいとされる［アリアーガ 1984[1621]］。そして雷はイリャパと呼ばれるが、イリャパは同時にミイラのことも示す。つまり男性デュアリズム、雷、ミイラは一連の概念として繋がっている。アンデスの男の双子は完全にコピーではなく、互いに異なっているということが特徴である。同じ素材で製作された 2 個のケーロも、互いに微妙に異なる場合が多い。それは同じものを作ることができなかったわけではなく、意図的に微妙にずらされていると見るべきである。この特徴は、アメリカ大陸の他の文化にも認められる。クロード・レヴィ＝ストロースは 2 つのものが完全に同一にならない特徴を「双子の不可能性」と説明した［レヴィ＝ストロース 2016[1991]: 93, 116, 275; Watanabe 2013: 250］。アンデスのデュアリズムを「双子の不可能性」の 1 つのバージョンとして捉えるならば、アメリカ大陸のより広い範囲に広まる考え方の 1 つであると言える。レヴィ＝ストロースは、むしろアメリカ大陸の双子の概念の方が本来の形で、完全なコピーと考える旧大陸の双子の概念は新たな特徴であると示唆しているが［レヴィ＝ストロース 2016[1991]: 314］、もしそうであるとすれば本来は人類のより広い対象に認められる特徴であっただろう。

5．北と南、山地と海岸

アンデス的とされる特徴には、人類に普遍的な特徴、アメリカ大陸に広く認められる特徴、形成期からインカまで認められる特徴、インカにのみ典型的に認められる特徴など様々なレベルがある。いかなる文化でもそうした重層性、歴史性は認められ、諸特徴の層をきちっと分けること自体はきわめて難しいが、記述するための概念を適用できる時間的空間的幅を認識することは必要である。

ムラはアンデスの根本となる特徴として垂直性を指摘した。比較的狭い範囲、つまり徒歩圏内に複数の環境帯が位置するアンデスの文化は、1 つの文化の環境帯が比較的限定される旧世界とは異なる特徴を示す。アンデス性を考えるためには、地域ごとに個別に記述するのではなく、表面上の多様性をまとめ上げるメカニズム、全体を貫く特徴を考察することが必要となる。アンデス研究では北と南、山地と海岸という区別がしばしば採用される。そうした表面上の区分を超えて、むしろそうした対立や差異を取り込みつつも統一性を維持するア

ンデス性を考えたい。それはインカ帝国にアンデス性が集約されるという考え方を軸にするために必要な考察である。

先スペイン期の諸社会の展開を捉えるため、ここでは、紀元前800年頃以降の中央アンデス諸社会の展開を、北部（ペルー北部、中央部）と南部（ペルー南部、ボリビア）に分けて整理してみたい。

形成期に大型神殿を造り更新する習慣が定着し広まったが、大型神殿の多くはペルー北海岸、中央海岸では紀元前800年頃に放棄された。ペルー北海岸、中央海岸では形成期後期（前800-250）、末期（前250-50）に大型神殿が建設されなかったが、その後モチェ文化でピラミッド型建築に形成期からの大型基壇建築の伝統の復活を見ることができる。シカン文化では、ピラミッド型建築物が存続し、橋型把手付き双注口壺などに見られるようにペルー南部からの要素を受け入れた。さらにその後、チムー文化ではボリュームのある基壇建築よりも、横方向に広まる平面的な建築構造が主流となるが、これは南のワリ文化と共通する特徴である。

一方ペルー南海岸やボリビアでは、紀元前800年頃以降、大型神殿の建設が始まる。ペルー南海岸のパラカス文化、その後のナスカ文化の人々は、基壇型建築を建設し、橋形把手付き双注口壺など独特の器形の土器を製作した。またナスカ文化の多彩色土器の要素を採り入れたワリ文化は、平面的な設計の行政センターを各地に設置した。そして先スペイン期の最後には、ペルー南部のクスコを拠点としてインカ帝国が台頭した。インカの建築も、基壇型建築ではなく、平面的な設計のものが主流である。

北部と南部の社会は、大きく2つの流れを形成し、時に混じり合い、最終的にインカ帝国という政体で合流したと見ることができる。アンデス考古学では北と南を分け別個の編年体系を用いて記述する傾向が強い。しかしアンデス文明の展開を俯瞰するためには、両者の関係を把握することが不可欠である。

同様に、山地と海岸を区別して記述する傾向がアンデス研究ではしばしば認められる。当然両者の間に差異は存在するが、垂直性こそがアンデスをアンデスたらしめているというムラの考えを踏襲するならば、山地と海岸の間の相互関係、またインカ帝国のように両者を内包したシステムの特徴を把握することが重要である。ラミーレスも、海岸では山地よりも専業化が進んでおり、商人も存在したという解釈に異議を唱え、基本的に山地でも海岸でも同じシステムが機能していたと主張する［Ramírez 2007］。山地と海岸の違いは、同じアンデス文化の多様性の範囲を示している。両地域に共通する特徴にこそ、アンデス的特徴を理解、説明する鍵があると思われる。

インカ帝国は1つの政治組織の中に山地と海岸を内包することで、垂直性を担保した。アンデスの特徴を垂直性に繋がるものと見るのであれば、海岸の山地のいずれかを拠点とし、片方にほぼ限定した展開を見せた場合、アンデス的ではなくなる。どの時代でも山地と海岸部の交流は行われており、諸社会間のインターアクションが活発な時代には垂直性に伴う様々な特徴が浸透した。そして1つの社会の中に多様な環境が内包する政体を大規模に展開したのは、ワリやインカなど南部の山地の社会であった。それがなぜ北部の社会ではなかったのか、なぜ海岸に拠点を置く社会ではなかったかは、今後の研究の1つの視点として有効であろう。

6．おわりに

表面に見えるアンデス的特徴を列挙することはできる。しかしそうした特徴をより深く説明するためには、それを生み出すメカニズム、構造を理解する必要がある。本稿ではそのための現在の見通しを述べた。全体の一部を切り取って説明するのではなく、できるだけ全体像を提示するように努めた。そのため本論文における分析の視点はやや散漫である。今後、より精度の高い分析をするためには、データを解釈し記述するための概

念やモデルを深く検討していくことが必要である。

人類学、考古学においてアンデス的特徴を例外として扱うのではなく、それを組み込んだ上で文明をはじめとする概念を組み直すことができれば、より汎用性の高いモデル、理論構築に繋がるであろう。

【謝辞】

本論文に対して的確かつ建設的なコメントをくださった 2 名の査読者にお礼申し上げる。本論文は南山大学 2017 年度パッヘ研究奨励金 I-A-2 による研究成果である。

註

（註 1） 16 世紀の記録者シエサ・デ・レオンは、現在のコロンビアにあたる北方からインカ帝国領内に足を踏み入れてから、そこに秩序を感じ取っている［シエサ・デ・レオン 2007[1553]］。

（註 2） Staple finance と wealth finance という区分と類似する。また儀礼経済は例えば威信材という形で個人に属する特徴というよりも、特定のコンテクストに依存している。

（註 3） ジャヌセク等は「聖性の輸送（transfer of sacredness）」［Janusek *et al*. 2013: 66］と紹介しているが、それは解釈の一面に過ぎない。

（註 4） 増田訳で「支配権」となっている単語は señorío である［Cieza de León 1996[1553]: 29］。Señorío は支配権と訳せるが、同時に支配権が及ぶ対象を示す。アンデスでは、支配権が及ぶ範囲とは、土地ではなく、人々のことである［渡部 2007］。

（註 5） チンチャイスユの第 6 のセケの 5 番目のワカである。カハナ（Cajana）と呼ばれ、ワイナ・カパック王の宮殿であったという。しかしガルシラソは、カサナはパチャクティ王の宮殿であったとしている［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 190］。またチンチャイスユの第 5 のセケの 5 番目のセケはコラコラ（Coracora）という名の小屋（buhío）でパチャクティ王（インカ・ユパンキ）のものとされている。しかしガルシラソによればコラコラはインカ・ロカが建てたとされる［ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1986[1609]: 189］。

（註 6） 形成期の神殿の中にはセチン・バホ遺跡のように 2000 年以上にわたり利用されたものもある。

（註 7） 一方で、非中央集権的社会の 1 つであるカハマルカ文化では、装飾的な土器は酒を入れる壺やコップではなく碗であり、同じく装飾的な土製スプーンと共に用いられた［Watanabe 2009］。

参照文献

Agurto Calvo, Santiago

1980 *Cusco: La Traza Urbana de la Ciudad Inca*. Proyecto Per 39, UNESCO. Instituto Nacional de Cultura del Perú, Lima.

Arriaga, Pablo José de（アリアーガ）

1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拝の根絶」（増田義郎訳）『ペルー王国史』 大航海時代叢書第 II 期 16 pp. 363-606、岩波書店。

Bauer, Brian S.

1998 *The Sacred Landscape of the Inca: The Cusco Ceque System*. University of Texas Press, Austin.

Bennett, Wendell C.

1948 The Peruvian Co-Tradition. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, edited by W. C. Bennett, pp. 1-7. Memoirs of the Society for American Archaeology, No. 4, Menasha, Wisconsin.

Castro, Victoria, Carlos Aldunate and Jorge Hidalgo (editors)

2000 *Nispa ninchis/decimos diciendo: conversaciones con John Murra*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Cavallaro, Raffael

1991 *Large-Site Methodology: Architectural Analysis and Dual Organization in the Andes*. Occasional Papers No. 5. Department of Anthropology, University of Calgary, Calgary, Alberta.

Cieza de León, Pedro de（シエサ・デ・レオン、ペドロ）

1979[1553] 『インカ帝国史』（増田義郎訳） 大航海時代叢書第 II 期 15 岩波書店。

1996[1553] *Crónica del Perú. Segunda Parte*. Edición, prólogo y notas de Francesca Cantú. Tercera edición. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

2007[1553] 『インカ帝国地誌』（増田義郎訳） 岩波書店。

Cobo, Bernabé

1964[1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, tomos 91-92. Ediciones Atlas, Madrid.

Conrad, Geoffrey W.

1981 Cultural Materialism, Split Inheritance, and the Expansion of Ancient Peruvian Empires. *American Antiquity* 46(1):3-26.

1982 The Burial Platforms of Chan Chan: Some Social and Political Implications. In *Chan Chan: Andean Desert City*, edited by M. E. Moseley and K. C. Day, pp. 87-117. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Conrad, Geoffrey W. and Arthur A. Demarest

1984 *Religion and Empire: The Dynamics of Aztec and Inca Expansionism*. Cambridge University Press, Cambridge.

Cook, Anita G.

2001 Huari D-shaped Structures, Sacrificial Offerings, and Divine Rulership. In *Ritual Sacrifice in Ancient Peru*, edited by E. P. Benson and A. G. Cook, pp. 137-163. University of Texas Press, Austin.

2015 The Shape of Things to Come: The Genesis of Wari Wak'as. In *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*, edited by T. L. Bray, pp. 295-334. University Press of Colorado, Boulder.

Costin, Cathy Lynne

2001 Craft Production Systems. In *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, edited by G. M. Feinman and T. D. Price, pp. 273-327. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Cummins, Thomas B. F.（カミンズ、トマス）

2002 *Toasts with the Inca: Andean Abstraction and Colonial Images on Quero Vessels*. University of Michigan Press, Ann Arbor.

2012 「インカの美術」（武井摩利訳） 『インカ帝国：研究のフロンティア』（島田泉・篠田謙一編） 国立科学博物館叢書 12 pp. 209-239、東海大学出版会。

D'Altroy, Terence N.（ダルトロイ、テレンス・N.）

2012 「インカ帝国の経済基盤」（竹内繁訳） 『インカ帝国：研究のフロンティア』（島田泉・篠田謙一編） 国立科学博物館叢書 12 pp. 121-149、東海大学出版会。

Day, Kent C.

1982 Ciudadelas: Their Form and Function. In *Chan Chan: Andean Desert City*, edited by M. E. Moseley and K. C. Day, pp. 55-66. University of New Mexico Press, Albuquerque.

藤本強

2007 『都市と都城』 同成社。

Garcilaso de la Vega, Inca（インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ）

1985/86[1609] 『インカ皇統記』（牛島信明訳）大航海時代叢書エクストラ・シリーズⅠ・Ⅱ 岩波書店。

Guaman Poma de Ayala, Felipe

1987[ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Edición, introducción y notas de John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge L. Urioste. Crónicas de América. Núm. 29a-b-c. Historia 16, Madrid.

Haun, Susan J. and Guillermo A. Cock Carrasco

2010 A Bioarchaeological Approach to the Search for Mitmaqkuna. In *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*, edited by M. A. Malpass and S. Alconini, pp. 193-220. University of Iowa Press, Iowa City.

Isbell, William H.

1991 Huari Administration and the Orthogonal Cellular Architecture Horizon. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 293-315. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

1995 Constructing the Andean Past or "As You Like it". In *Current Research in Andean Antiquity*, edited by A. Zighelboim and C. Barnes, pp. 1-12. Journal of the Steward Anthropological Society 23(1-2).

1997 *Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization*. University of Texas Press, Austin.

2004 Palaces and Politics in the Andean Middle Horizon. In *Palaces of the Ancient New World*, edited by S. T. Evans and J. Pillsbury, pp. 191-246. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Isbell, William H., Christine Brewster-Wray and Linda E. Spickard

1991 Architecture and Spatial Organization at Huari. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 19-53. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

泉靖一

1966 「初めに神殿ありき：無土器時代に農業も」 『朝日新聞（夕刊）』:5。

Janusek, John W.

2015 Of Monoliths and Men: Human-Lithic Encounters and the Production of an Animistic Ecology at Khonkho Wankane. In *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*, edited by T. L. Bray, pp. 335-365. University Press of Colorado, Boulder.

Janusek, John Wayne, Patrick Ryan Williams, Mark Golitko and Carlos Lémuz Aguirre

2013 Building Taypikala: Telluric Transformations in the Lithic Production of Tiwanaku. In *Mining and Quarrying in the Ancient Andes*, edited by N. Tripcevich and K. J. Vaughn, pp. 65-97. Springer, New York.

Kato, Yasutake（加藤泰建）

1992 「牙と王冠：モチェの図像表現と王権」 『ジャガーの足跡：アンデス・アマゾンの宗教と儀礼』（友枝啓泰・松本亮三編） pp. 153-175、東海大学出版会。

2014 Kuntur Wasi: un centro ceremonial del Período Formativo Tardío. In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*, edited by Y. Seki, pp. 159-174. Senri Ethnological Studies 89. Museo Nacional de Etnología, Osaka.

川田順造

2010 『文化を交叉させる―人類学者の眼』 青土社。

Kirchhoff, Paul

1943 Mesoamérica: sus límites geográficos, composición étnica y caracteres culturales. *Acta Americana* 1:92–107.

Kolata, Alan Louis

1982 Chronology and Settlement Growth at Chan Chan. In *Chan Chan: Andean Desert City*, edited by M. E. Moseley and K. C. Day, pp. 67-85. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Lévi-Strauss, Claude（レヴィ＝ストロース、クロード）

2016[1991] 『大山猫の物語』（渡辺公三監訳、福田素子・泉克典訳） みすず書房。

Makowski, Krzysztof（マコフスキ、クリストフ）

2012 「都市と祭祀センター：アンデスにおける都市化ついての概念的挑戦」（渡部森哉訳） 『年報人類学研究』 2:1-66。

Moseley, Michael E.

1992 *The Incas and Their Ancestors: The Archaeology of Peru*. Thames and Hudson, London.

Moseley, Michael E. and Kent C. Day (editors)

1982 *Chan Chan: Andean Desert City*. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Murra, John V.

1962 Cloth and Its Functions in the Inca State. *American Anthropologist* 64:710-728.

1972 El "control vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, edited by J. V. Murra, pp. 429-476. Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central, vol.2. Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Huánuco.

1980[1955] *The Economic Organization of the Inka State*. Research in Economic Anthropology, Supplement 1. JAI Press, Greenwich.

Niles, Susan A.（ナイルズ、スーザン）

2012 「インカ王領とは？：建築、経済、歴史」（徳江佐和子訳） 『インカ帝国：研究のフロンティア』（島田泉・篠田謙一編） 国立科学博物館叢書 12 pp. 289-304、東海大学出版会。

Ogburn, Dennis

2004 Evidence for Long-Distance Transportation of Building Stones in the Inka Empire, from Cuzco, Peru to Saraguro, Ecuador. *Latin American Antiquity* 15(4):419-439.

Pärssinen, Martti

1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*. Studia Historica 43. Societas Historica Finlandiae, Helsinki.

Pillsbury, Joanne

2004 The Concept of the Palace in the Andes. In *Palaces of the Ancient New World*, edited by S. T. Evans and J. Pillsbury, pp. 181-189. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Platt, Tristan

1986 Mirrors and Maize: The Concept of Yanantin among the Macha of Bolivia. In *Anthropological History of Andean Polities*, edited by J. V. Murra, N. Wachtel and J. Revel, pp. 228-259. Cambridge University Press, Cambridge.

Ramírez, Susan E.

1982 Retainers of the Lords or Merchants: A Case of Mistaken Identity? In *El Hombre y Su Ambiente en los Andes Centrales*, edited by L. Millones and H. Tomoeda, pp. 123-136. Senri Ethnological Studies No. 10. National Museum of Ethnology, Osaka.

1996 *The World Upside Down: Cross-Cultural Contact and Conflict in Sixteenth-Century Peru*. Stanford University Press, Stanford.

2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford University Press, Stanford.

2007 It's All in a Day's Work: Occupational Specialization on the Peruvian North Coast, Revisited. In *Craft Production in Complex Societies: Multicraft and Producer Perspectives*, edited by I. Shimada, pp. 262-280. The University of Utah Press, Salt Lake City.

Rostworowski de Diez Canseco, María

1989[1970] Mercaderes del valle de Chincha en la época prehispánica: un documento y unos comentarios. In *Costa Peruana Prehispánica*, edited by M. Rostworowski de Diez Canseco, pp. 213-238. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Rowe, John Howland

1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In *Handbook of South American Indians, Vol. 2*, edited by J. H. Steward, pp. 183-330. Bureau of American Ethnology, Bulletin 143. Smithsonian Institution, Washington, D.C.

1967 What Kind of a Settlement Was Inca Cuzco? *Ñawpa Pacha* 5:59-76.

Rowe, John Howland and Dorothy Menzel (editors)

1967 *Peruvian Archaeology: Selected Readings*. Peek Publications, Palo Alto.

Salazar, Lucy C. and Richard L. Burger

2004 Lifestyles of the Rich and Famous: Luxury and Daily Life in the Households of Machu Pichu's Elite. In *Palaces of the Ancient New World*, edited by S. T. Evans and J. Pillsbury, pp. 325-357. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Salomon, Frank

1991 Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript. In *The Huarochirí Manuscript: An Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*, edited by F. Salomon and G. L. Urioste, pp. 1-38. University of Texas Press, Austin.

Starn, Orin

1991 Missing the Revolution: Anthropologists and the War in Peru. *Cultural Anthropology* 6:63-91.

Taylor, Gerald

1976 Camay capac et camasca dans le manuscript quechua de Huarochirí. *Journal de la Société des Américanistes*

63:231-244.

Topic, John R. and Theresa Lange Topic

2001 Hacia la comprensión del fenómeno Huari: una perspectiva norteña. *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]:181-217.

Urton, Gary

2003 *Signs of the Inka Khipu: Binary Coding in the Andean Knotted-String Records*. University of Texas Press, Austin.

2017 *Inka History in Knots: Reading Khipus as Primary Sources*. University of Texas Press, Austin.

Watanabe, Shinya（渡部森哉）

2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media. *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2):205-235.

2007 「インカ国家における地方支配―ペルー北部高地カハマルカ地方の事例―」 『国立民族学博物館研究報告』 32(1):87-144。

2010 『インカ帝国の成立：先スペイン期アンデスの社会動態と構造』 春風社。

2013 *Estructura en los Andes Antiguos*. Editorial Shumpusha, Yokohama.

2014a 「ワリ帝国の行政センターと地方統治：ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」 『古代アメリカ』 17:25-52。

2014b Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 16[2012]:105-129.

Willey, Gordon R.

1948 A Functional Analysis of "Horizon Styles" in Peruvian Archaeology. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, edited by W. C. Bennett, pp. 8-15. Memoirs of the Society for American Archaeology, No. 4, Menasha, Wisconsin.

1971 *An Introduction to American Archaeology, Vol. 2, South America*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

Zuidema, R. Tom

1964 *The Ceque System of Cuzco: The Social Organization of the Capital of the Inca*. E. J. Brill, Leiden.

Una consideración sobre «lo andino»

Shinya Watanabe
(Universidad Nanzan)

Palabras clave: «lo andino», verticalidad, *huaca*, ritual, cultura material

En este artículo se consideran las características de los Andes con la finalidad de describir y sintetizar en forma coherente las sociedades prehispánicas. El uso frecuente de la expresión «lo andino» indica, dentro de un amplio concepto, las peculiaridades de los Andes, una de las áreas culturales de las Américas. Sin embargo, queda aún por definir el concepto «lo andino».

Para explicar las características culturales andinas primero se establecerán los rasgos de la cultura incaica para luego compararlos con los de las que le antecedieron. Trataremos nueve aspectos culturales: 1) Verticalidad y economía autosuficiente: como indica Murra, una de las características andinas es la verticalidad, y los habitantes perseguían la llamada complementariedad ecológica, un modo de economía autosuficiente que utilizaba varios pisos ecológicos. En los Andes no se desarrolló el sistema de intercambio de bienes cotidianos, moneda o mercado. 2) Riqueza, terreno y mano de obra: el concepto andino de riqueza se relaciona con la mano de obra más que con los materiales, y no existía el concepto de tenencia de la tierra sino el de usufructo de terreno. 3) *Huaca* y ritual: la materialidad en los Andes se vincula a los aspectos rituales, ya que las *huacas* mismas son entidades sobrehumanas que se activan mediante el *camay*. 4) Trabajo hecho y tiempo: en el Imperio inca había «trabajos hechos» que no eran necesarios sino que tenían como propósito controlar el tiempo de la gente. 5) Palacio y templo: cada rey tenía que construir sus propios palacios dentro del Cuzco, y se les contaba como *huacas* en la lista de *ceques*. 6) Ciudad y especialización del trabajo: los sitios grandes difieren de las ciudades europeas, ya que no residían muchas personas permanentemente; de hecho, se abandonaban en el lapso de unos siglos de acuerdo con la decadencia del sistema político y ritual. Por otro lado, la especialización del trabajo tuvo un carácter ritual y de «producción dependiente» (*attached production*). 7) Tumbas y momias: los reyes incas no tuvieron gran arquitectura funeraria con ofrendas. La gente serrana colocaba las momias en las *chullpas*, pero su tamaño no implicaba poder. 8) Iconografía andina: en la cultura incaica no es abundante la representación antropomorfa y se carece de iconografía de los reyes incas, en contraste con las culturas preincaicas. 9) Los gemelos en el Nuevo Mundo: la dualidad andina se llama *yanantin* y este concepto concuerda con el carácter de «imposible gemelidad» de Lévi-Strauss.

En resumen, para señalar qué es «lo andino» no se puede aplicar el modelo incaico *a priori* a los casos preincaicos y se necesita entender la multiplicidad de los elementos culturales. El Imperio inca logró integrar políticamente los Andes, un territorio donde existe una amplia diversidad ecológica y se perciben similitudes culturales en las sociedades existentes al interior de su ámbito. A pesar de que se usa frecuentemente la separación entre las partes norte y la sur, o la sierra y la costa de los Andes Centrales se necesita considerar al territorio en su integridad para entender «lo andino».

原 稿 受 領 日　2017年8月24日
原稿採択決定日　2017年10月16日